

## 発達障害の理解と支援～幼児期から青年期のいきいきと暮らしやすい社会づくりのために～

# 春の府民講座報告 幼児期・学齢期における発達障害の理解と支援



講師

竹田 契一 氏（大阪教育大学名誉教授 大阪医科大学LDセンター顧問）

今年度は『発達障害の理解と支援～幼児期から青年期のいきいきと暮らしやすい社会づくりのために～』をテーマに春・冬の2回シリーズで府民講座を開催します。第一弾として、5月21日(土)、京都市伏見区の呉竹文化センターで、大阪医科大学LDセンター顧問の竹田契一 大阪教育大学名誉教授を講師に迎え、春の府民講座を開催しました。保護者、福祉、行政、教育関係者、一般の府民の方を含めた約450名の参加がありました。

特別支援教育の推進にこれまで関わってこられた竹田先生より、発達障害の子どもたちや大人の方を取り巻く環境が、世界そして日本の中でも大きく変化していることをわかりやすく御説明いただきました。

「10年目の特別支援教育」「障害者差別解消法の施行」「発達障害の子どもたちの特性と困り感」をキーワードに、これまで出会った発達障害の子どもたちや大人の方、また支える保護者の方々等の様々なエピソードを加えながら、発達障害の子どもたちの困り感と教育に求めることについて、御講演をいただきました。

### 講演内容

現在の特別支援教育を進める上で、改めて教育現場が考えるべきこととして以下の6点を冒頭に伝えられました。



- 1 特別支援教育コーディネーターは機能しているのか。
- 2 通常の学級に在籍する発達障害の児童生徒の可能性は、最低6.5%であることをふまえ、各学校は実態把握しているのか。
- 3 校内委員会は機能しているのか。
- 4 個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成と実施のレベルは。
- 5 子どもの行動面のみが特別支援ではない。「学力をのばすこと」が最終目的。
- 6 専門家チーム、巡回相談システムは機能しているのか。

また障害のある人への合理的配慮を定めた障害者差別解消法が4月に施行されたことも取り上げ、障害のない人との平等な機会などの保障（＝差別の禁止）のためにも、『何が差別か』きちんと判断できる『ものさし』として差別から守るための法律であると、その意義と必要性をお話されました。そして教育現場で求められることとして、『合理的配慮』の考え方をしっかり理解し、対応すること。「学校が『障害のある子だけを特別扱いできない』という差別になる。」と指摘され、フェンス越しに野球を観戦する身長差のある子どもたちを例に挙げ、合理的配慮について説明をされました。



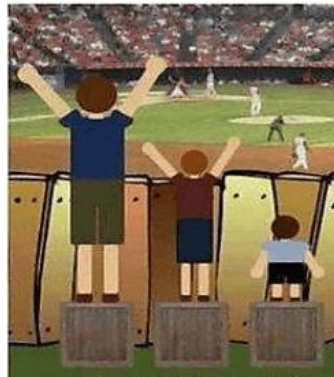
### 京都府スーパーサポートセンター

内閣府から障害者差別解消法のリーフレットや京都府では、平成27年4月から『京都府 障害のある人もない人も共に安心していきいきと暮らしやすい社会づくり条例』が施行され、リーフレットが発行されています。

ご参考にしてください。



台を「配慮」と考えると、全員に同じ高さの台を用意するという意味では、「平等」かもしれない。しかし、個々の特別な ニーズ（ここでは身長差）には配慮されていない。試合を見ることを「教育の スタート」と捉えると、ここで言う「平等」では共に学ぶことはできない。「公平」な配慮が共に学ぶための「合理的配慮」となる。共生社会においては「公平」の考え方をみんなで共有する必要がある。



<平等イメージ>



<公平イメージ>

また竹田先生は、『合理的配慮』について、障害のある子どもが権利や自由を享受できるように行わなければならない。さらに障害のある子どもたちが、他の子どもたちと同じスタートラインに立てるように行わなければならない「変更」や「調整」とし、すでにある環境や条件に対して、子どもの特性にあわせた変化をつけることが大切と指摘され、以下の点に留意することを示されました。

- 学校の「好意」で行うものではなく、子どもの「権利」である。
- 合理的配慮は、目標値ではない。（「合理的配慮をしました。」で「満足」してはならない。）
- 合理的配慮は、さらに次を見据えて積極的な支援につなぐことが大切。
- 公平であることが合理的配慮の基本

他の子どもたちと同じスタートラインに立てる配慮として、1.3 倍の時間延長や拡大コピー、別室受験、代読など大学入試センター試験での配慮事項（2015 年 1 月より）の具体的な例を挙げ、説明されました。

また併せて、配慮ポイントとして、中・高等学校での合理的配慮の実績を引き継ぐ、他の学生とフェアな競争であるかどうか。といった点も指摘されました。

さらに発達障害の子どもたちについて

『困った子ではなく困っている子といった視点で対応することが大切』、発達障害の前提知識として『育て方やしつけ、環境が障害の原因ではない。脳に何らかの問題がある。』と説明し、親の責任ではないことを強調されました。さらに『発達障害だから非行になるのではない。』学校と家庭をベースにした環境の中で、適応のために必要な支援がなされない場合に「ハイリスク」となりやすいとも指摘されました。



「わからないからやってしまう」  
「うっかりやってしまう」  
「どうして、僕は叱られるの？」

その上で、特にディスレクシアを中心に、発達障害の特性と対応について具体的に説明されました。

## ●学習障害（LD） \*とりわけディスレクシアについて

### なぜ学習困難か①

- 学び方がわからない
- 優先順位がわからない（見通し）
- メタ認知（自分の長所・短所の自己理解）が弱い
- 記憶の障害（すぐに忘れる）



## なぜ学習困難か②

- 聞く力の障害（耳からの情報処理の弱さ、集団の中で聞く力が低下、分かったつもりになる、一部しか聞いていない、自分の世界に没頭する、騒音の中で音の聞き分ける力が弱い）
- 不注意が多い（ケアレスミスから始まる）
- 視知覚の障害（ものが二重に見える ・焦点が合わない） など

上記の内容について、以前竹田先生が解説者として収録に参加されたテレビ番組の成人の方の再現ドラマをもとに具体的に紹介されました。

## ●注意欠陥多動性障害（ADHD）

- ADHDとは、不注意・多動性・衝動性が伴う障害
- 特徴として、実行機能の障害（以下の弱さが見られます）  
（計画を立てる／優先順位をつけて行動／二つのことを同時にすること／整理整頓 など）
- 良いことをしたときは、「ほめて励ます」、悪いことをしたときは、間違いをその場で正すやり方が有効
- 大きな課題は、スモールステップに分けて取り組む「チャンキング」が有効
- カリスマティック・アダルト  
＝自分を理解してくれている人物「あこがれの人」「大人になったらあのようになりたい」  
→そのような人物が思春期をうまく乗り切るために必要。
- 学校はストレスの源
  - 自分の行動や感情をコントロールできなくなる
  - まずは不安の兆候（サイン）に気づくこと
  - 自分自身をコントロールできるようにサポートすることが支援の基本
  - 落ち着いてから『話し合う』フォローアップが大切

## ●自閉症スペクトラム障害

- アスペルガー障害は、心の病ではない。脳の機能的な障害。
- 自閉症の特徴
  - ①人間関係の障害（社会性の障害）
  - ②言語・コミュニケーションの障害
  - ③想像力の障害と特異的な行動
  - ④感覚の障害（特定に音や匂い等に敏感に反応し、不快・不安を感じる）
- 他人がどう考えているのか推理することが苦手
- 相手の気持ち、感情の理解が弱い
- 相手を傷つけていることに気づかない
- 相手の言った意味がわからず、ずれた答えを言う
- 人の表情が読めない（冗談が通じない、よくだまされるなど）

### <支援のポイント>

- 感情を表す言葉の意味を確かめる
- 相手の気持ちについて考える機会を持つ
- 集団参加の力を高める（部分的にでもよいので『つきあう』力を身に着ける）
- 自己理解を高める（自分の特性を理解する、自分の感情の程度を理解し、コントロールする方法を使う）
- 説教はダメ！  
（頭ごなしに「間違っている」「謝りなさい」などの言葉を言っても不快体験を増すだけ。本人は何を叱られているのかの理解ができていないことも多い。寄り添い、本人の言い分を聞いてあげることが大切）
- 小学校はまずは学習スキルを徹底
- 幼児期からコミュニケーションスキル向上を家庭で行う。

# ～参加者アンケート～

## <一般の方より>

- ・熱意ある素晴らしい講演でした。分かりやすい内容で勉強になった。来てよかった。もっと時間が欲しいくらいでした。
- ・私は、学習障害のある子どもたちが通うディサービスでアルバイトをしています。先生のお話と子どもたちの様子と重なることが多くあり、大変勉強になりました。明日からの関わり方に繋がりたいと思います。

## <保護者の方より>

- ・子どもたちの苦しみが伝わってきた。子どもがADHDの特徴があると言われ、参加した。とても怖がりて頼りない子で扱いにくい子と思っていたが、この子がどんな不安を抱えていたのだろうと思うと、涙が出る。彼の気持ちに寄り添ってこれからたくましく生きていけるように見守ってやりたいです。
- ・発達障害の原因について「子育て環境によるものではない。」と何度も大きな声で言って頂いて安心した。発達障害の子供は真っ暗闇の中において、自分の懐中電灯の光のあたるところだけしか見えないというのは分かりやすかった。手を引いて丁寧に伝え教えることが大切だと思った。
- ・私も子どもも発達障害があります。私は周りから理解されなかったが、私の子どもやこれから大人になる発達障害のある子どもたちに希望が持てました。

## <保健・医療・福祉関係者の方より>

- ・具体的な話がわかりやすかった。知っているつもりでも分かり切っていないことが理解できた。一人一人の人生が支援者の手にかかっていることを感じ、今後も勉強し続ける必要性を改めて感じた。
- ・今後の保育現場での支援方法をどのように考えていくべきかについて大変参考になりました。”子どもに寄り添う”ことはどのような場面、どの様な子どもに対しても子どもにかかわる大人にとって 一番大切なことであることを再認識しました。

## <教育関係者の方より>

- ・読み書きに困難を抱えている子どもの心情、周囲の人の気づきにくさについて知りました。社会の中に理解が広がってきていることが大変うれしく思いました。
- ・高校や大学、そして一般社会で生きやすくなるために通常の学級に在籍する支援が必要な生徒にどのような支援をしていくのかを教師がもっと積極的に学んでいかなければならないと思いました。
- ・具体例があり、時には胸が熱くなりました。子どもの内面をしっかりと見据え「裏に何があるのかを見て」指導していきたいと思います。

## 【冬の府民講座のお知らせ】

日時：平成29年1月28日（土）13:30～16:30

場所：現在調整中

内容：『思春期・青年期における発達障害の理解と支援』

講師：小栗 正幸 氏（宇部フロンティア大学）



Kyoto Prefecture Super Support Center

京都府スーパーサポートセンター